

くまもと

361号

日本郵趣協会
熊本支部会報
2022.1

新年あけましておめでとうございます。



寅年にちなんで

内野 実

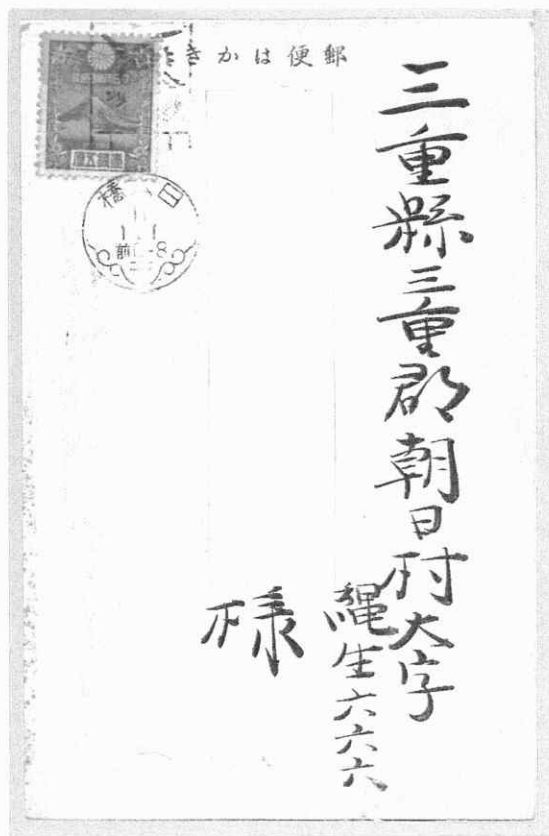
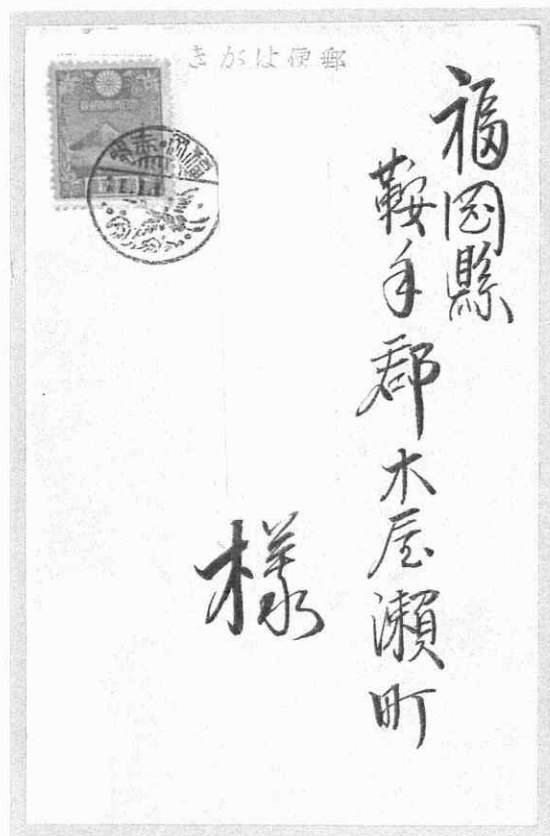


最初に発行された年賀切手は、S10年12月1日に発行のS11年用の「富嶽の図」です。年賀切手発行の提案をしたのは、大分県出身の白名子実三です。第2次昭和切手4銭に採用された「八紘基柱」の作者です。



その戦略とは、当時毎年12月20日から年末の29日までの年賀状特別扱い期間中に差し出される年賀状は全体の70%あまり、最終日の29日に集中して差し出されることが多かったため、特別な「年賀切手」を発行し、「年賀印」も使用して国民に早期差し出しの周知徹底を図るというものでした。

使用された年賀印は2種類あり、手押し用と機械印がありますが、共に鶴を描いています。年賀切手は、この後はS12年、S13年と発行されたが、S12年日中戦争が始まり自粛ムードの高まりで、以後戦前の年賀切手は発行されなくなりました。年賀切手が復活するのは、戦後のS24年「羽根つき」となります。



今年、「虎」年です。表紙に掲載したのは、S25年の年賀はがき発売記念のタトウと年賀切手小型シートです。タトウは販売用と進呈用(非売品)で合わせて4種類あり、年賀状の末等の景品として作成された年賀切手の小型シートが、当選した時に小型シートを保管するために発売されました。

ちなみに、翌S26年にも「ウサギ」をあしらったタトウが存在するが、多くは作成されなかったようで、余り見かけません。S25年絵入り年賀印年賀状と12年後、S37年の寅年小型シート「みほん」を披露いたします。

